

神秘学ポエジー 風遊戯  
photopos  
135

【神秘学ポエジー～風遊戯 第270集】 photo ヴァージョン

photopos 3351-3375

《2023.11.11～2023.12.5》

神秘学遊戯団



息苦しくなったら  
マニュアルを捨て  
檻の外に出る

みんなが  
おなじ方向を向くのは  
ひとつの病である

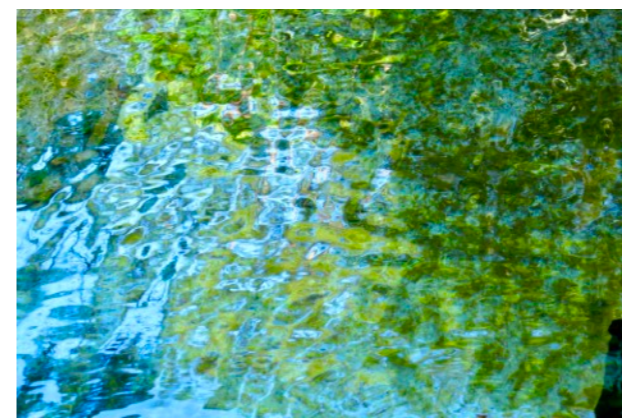
みんなが  
おなじ答えになると  
そこは監獄になる

みんなは  
みんな  
ではなく  
ひとりひとりだから

それぞれが  
じぶんの問いをもち  
それぞれが  
じぶんの方向へ歩めば

与えられた答えから離れ  
みんなという檻  
の外に出られる

いつもはじめての問いと  
はじめての景色の下  
はじめてのじぶんに  
ひらかれて



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



愛に悩み  
悩みつづけるのは  
愛は与えられはしないからだ

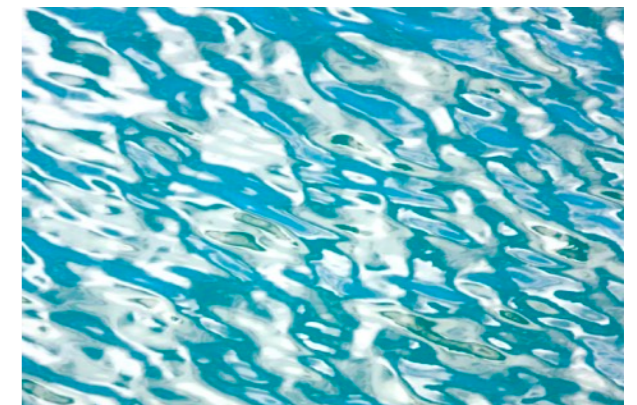
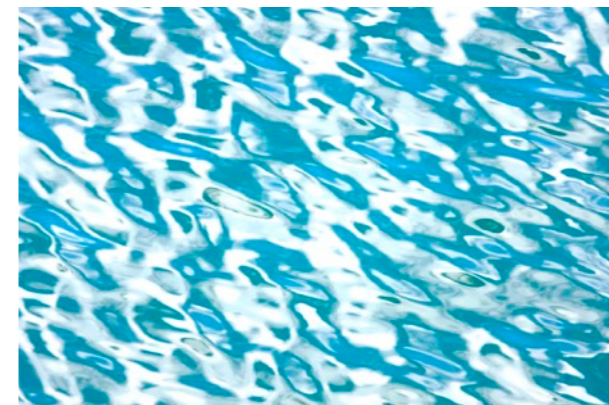
愛は  
みずから与えることで  
はじめて得られるいのちの水

愛に迷い  
迷いつづけるのは  
愛に道しるべはないからだ

愛は  
みずからつくることで  
はじめて歩めるいのちの道

愛を問い  
問いつづけるのは  
愛は答えではないからだ

愛は  
みずから答えることで  
はじめて生まれるいのちの智慧





松のことは  
松に習え

では  
私のことは  
私に習え  
なのか

汝自身を知れ  
という箴言があるが

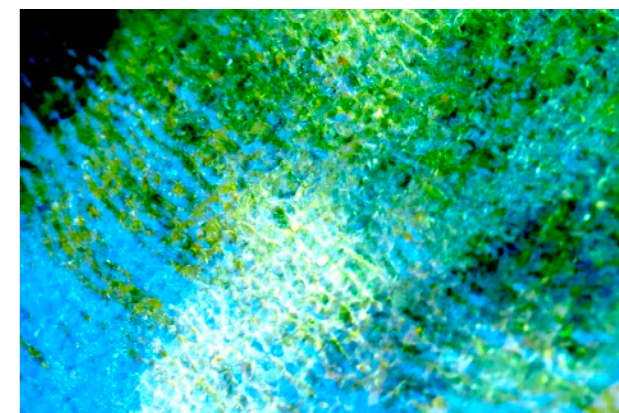
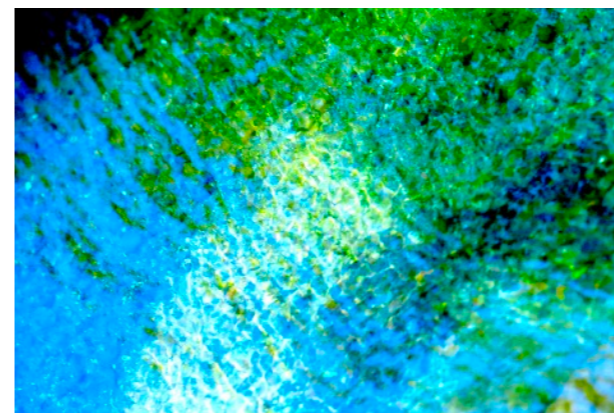
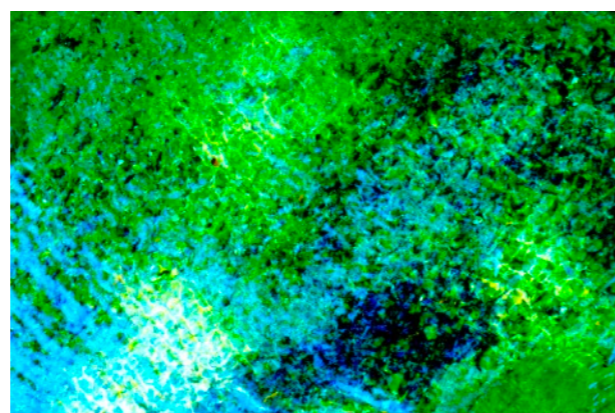
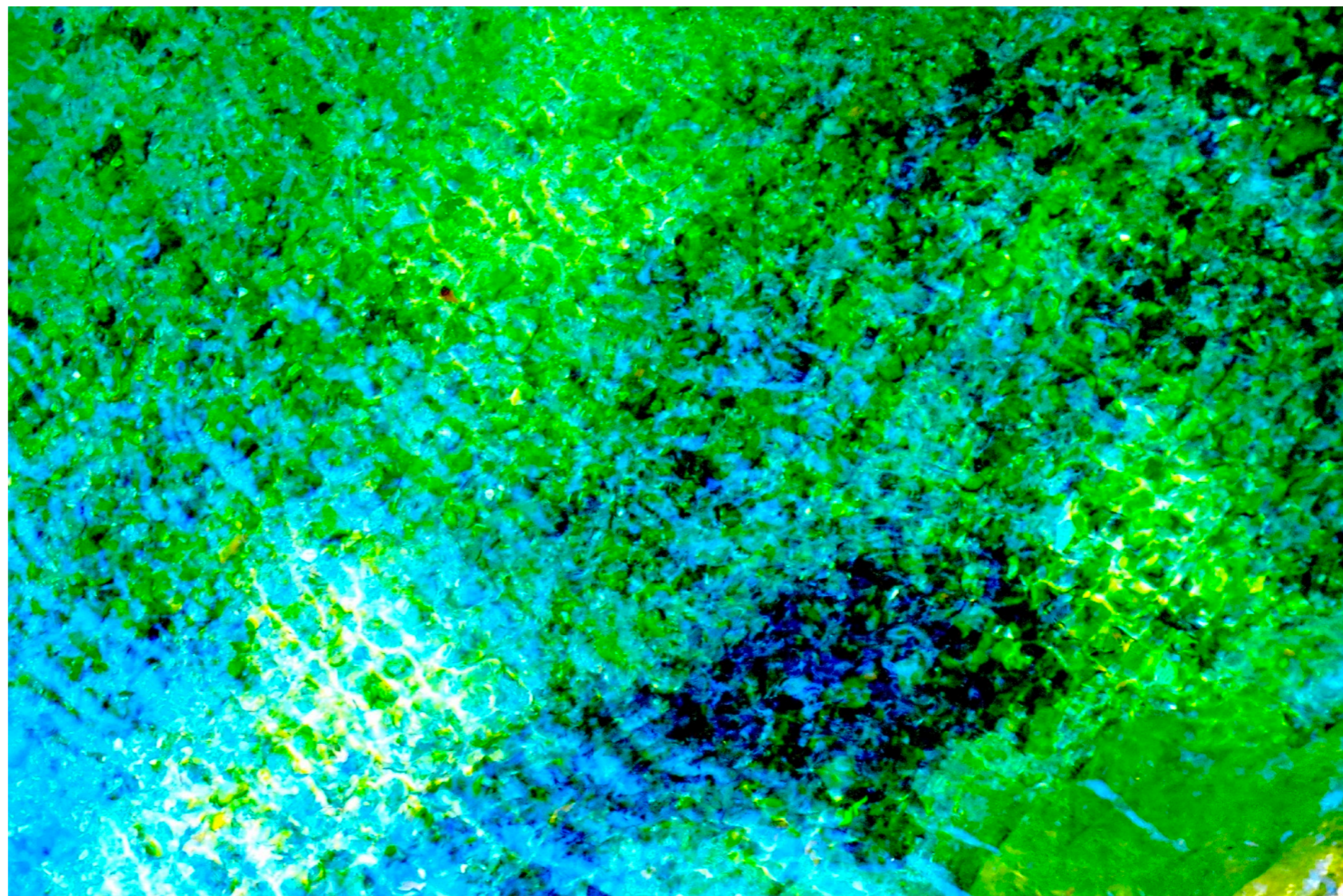
私はモナドである  
モナドには窓がない

故に  
私は  
習うために  
私を去り  
松になる

そして  
松になり  
松自身を知らねばならぬ

神もまた  
その如く  
神を去り  
私にさえなるのか

神自身を  
知るために





遊べや  
遊べ  
狂えるほどに

遊べや  
遊べ  
戯れながら

遊べや  
遊べ  
心を解いて

遊べや  
遊べ  
馬鹿になり

遊べや  
遊べ  
道化となり

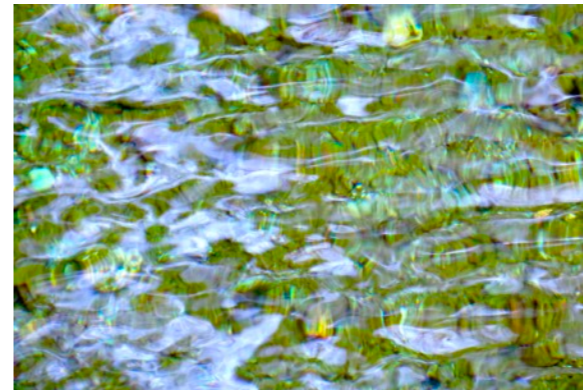
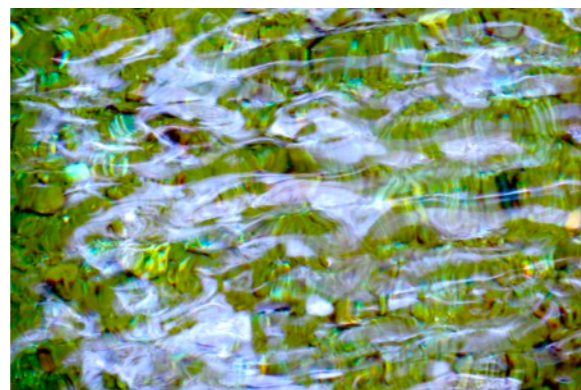
遊べや  
遊べ  
知を笑い

遊べや  
遊べ  
死など恐れず

遊べや  
遊べ  
生をも恐れず

遊べや  
遊べ  
声なき声で

遊べや  
遊べ  
言葉を超えて



※愛媛県久万高原町・面河溪にて



ギリシア神話にでてくる  
プロクルーステースの  
鉄の寝台に寝た旅人は

寝台からはみ出した体は切断され  
寝台の長さに足りないときには  
体を引き伸ばされる拷問にあったが

我々の世界には  
そんなプロクルーステースが  
いたるところに潜んでいる

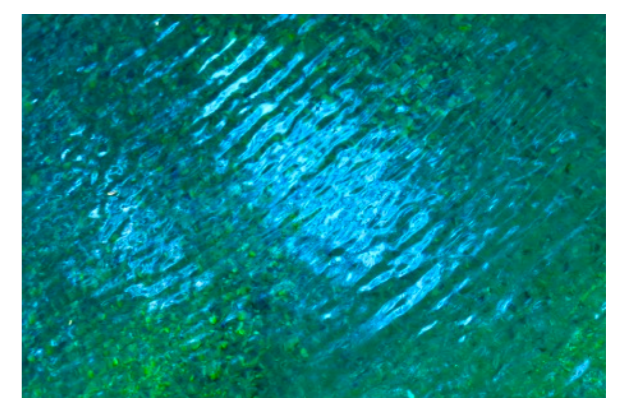
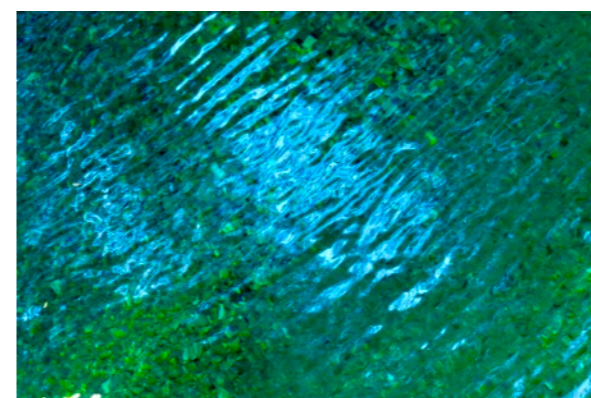
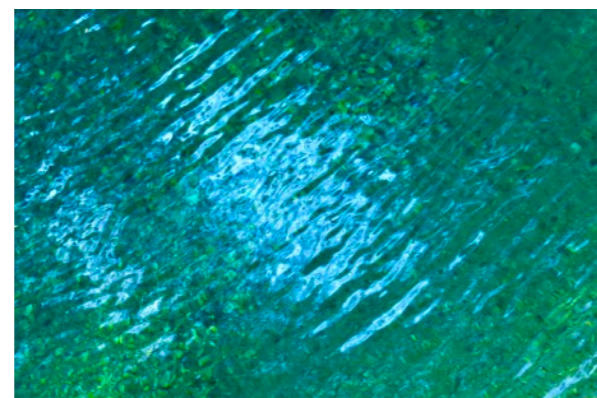
ルールがつくられると  
ルールが適用できないときにも  
ルールはそのまま  
反した者はルール違反となってしまう

言葉が定義されると  
現実が変わっても  
定義はそのまま  
現実が拷問にあってしまう

論理が決められると  
そこに矛盾が生まれても  
論理はそのまま  
無理やり適用されてしまう

我々は変わりつづける  
ルールも言葉も論理も変わっていくように  
同じかたちのままではない

プロクルーステースの恐怖を終わらせ  
世界を自由に生成させるために  
我々はテーセウスにならねばならぬ





どこで  
切るか

どこで  
分けるか

どこで  
つなげるか

どこで  
重ねるか

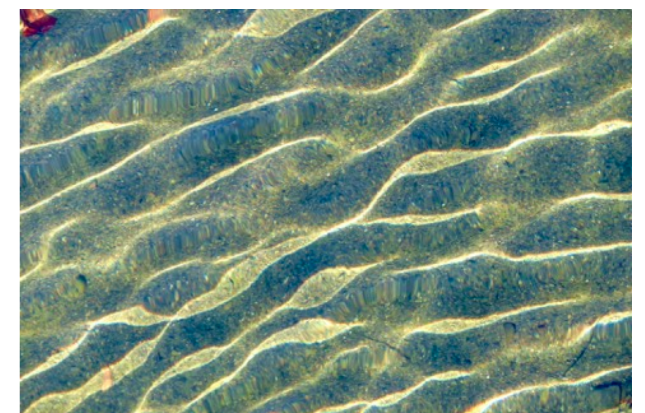
どこで  
逆接させるか

どこで  
裏返すか

どこで  
射影するか

そうすることで  
不可思議なほど  
その姿は変わってゆく

わたしも  
そして  
世界も





☆photopos-3357 2023.11.17

知は力になるが  
力には  
ふたつの顔がある

知ること  
照らされる顔と  
照らすことで  
見えなくなる顔

知れば知るほどに  
見えなくなる顔がある

わたしはひとりだが  
ひとは  
知らないでいる  
たくさんの存在からできている

そして右手のことさえ  
左手は知らないでいたりするのだ

ましてわたしのなかのたくさんの存在が  
わたしをどのように活かしているかなど  
知りようもない

わたしの照らすわたしは  
わたしのほんのひとつの顔

せめてその顔だけでも  
ひとつであればと思うのだが  
それさえ変わりつづけている

わたしという謎は迷路のようだ

それでもそんなわたしを  
見えないところからささえている  
不思議な力がある



※高知県四万十市・黒尊溪谷にて



光の  
明滅を  
繰り返す如く

生きとし  
生けるもの

生まれ  
死に  
生まれ  
死に

ありとし  
あるもの

現れては  
消え  
現れては  
消え

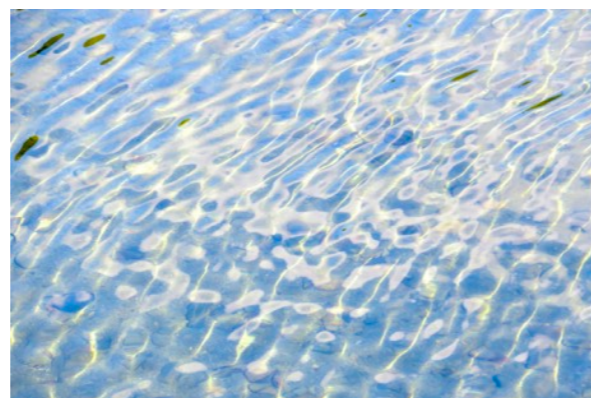
それらの  
歩みの

流れては  
淀み  
流れては  
淀み

すべては  
すべてを映し  
すべてに映され

すべては  
すべてを結び  
すべてに結ばれ

宇宙の森羅は  
奇蹟の如く  
紡がれてゆく



※高知県四万十市・岩間沈下橋にて



未来が  
過去になるとき  
いつまでも  
過去から  
自由にはなれないでいる

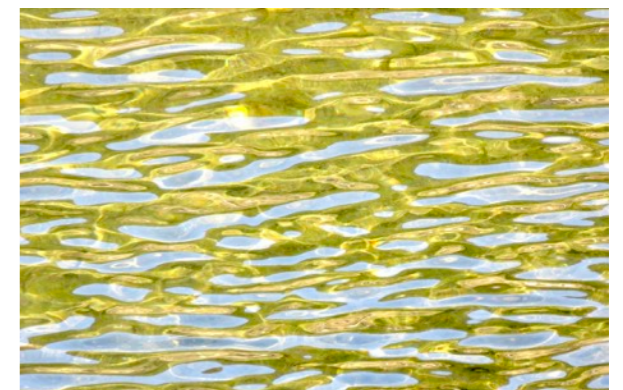
未来は  
過去でなくてもいい  
やっとそう思えても

過去という地雷は  
いたるところに埋められていて  
ふとしたときに  
それを踏んでしまったりもする

そのことを恐れ  
地雷を撤去することに  
とらわれすぎると  
未来を過去に逆戻りさせてしまう

過去から自由になろうとして  
生まれ変わりもするのだろうが  
過去という初期条件を書き換えるためには  
その数式を成立させている  
世界認識を変えねばならない

未来を  
未来にするために



※高知県四万十市・岩間沈下橋にて



いまはまだ  
ためにならなくても  
役に立たなくても  
だれにも認められなくても

魂のために  
学ぶ

はるかな未来の  
あるいは  
時を超えた彼方にいる

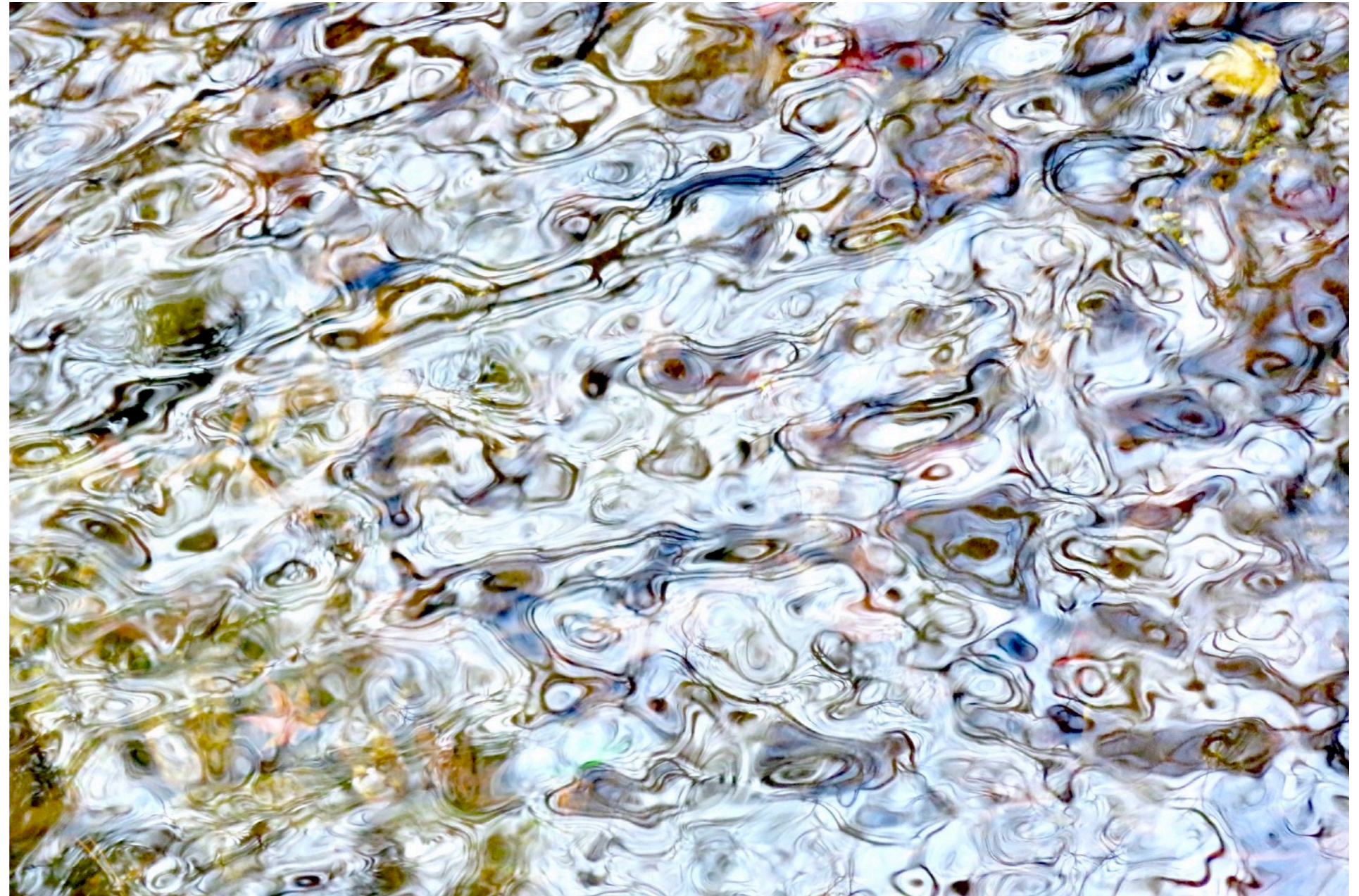
じぶんの  
そして望むらくは  
ほんとうのみんなのために  
学ぶ

知者とされる者が  
そうだといひ  
みんなが  
それに従ったとしても

そうは思えないことは  
そうは思えないといひ  
わからないことは  
わからないといひ

急がず  
止まらず  
わかるまで学ぶ

わかったと思っても  
そこから自由でいる  
ほんとうに学ぶために





どんなことも  
じぶんで選んでいる  
ということもできるだろうが

なぜそれを  
選んでいるのか  
だれも知らないでいる

けれど  
知らないでいるのに  
ほんとうは知っている

知りたいのに  
知りたくないのだ

知らないでいることで  
得られるものがあり  
知ること  
得られなくなるものがある

決められた答えのために  
問いがあるのではなく  
問いの向こうに  
自由と創造があるからだ

そこに  
生の秘密はあり  
喜びはそのなかでこそ  
ひらかれてゆく





欲望に  
焼かれる

焼かれれば  
焼かれるほど  
その火は  
さらに燃え盛る

消そうとしても  
消えはしない

欲望は  
からだとともに  
生まれ  
からだとともに  
育っていくが

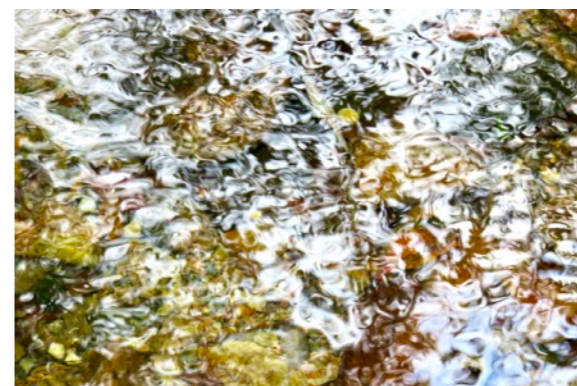
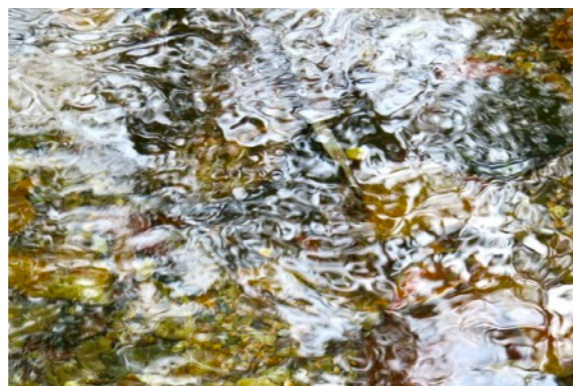
からだをなくしても  
育った欲望が  
消えることはない

欲望を持て余し  
なくそうとしても  
なくなりはしない  
なくそうとするのも  
欲望にほかならないから

できるのは  
欲望を  
見つめることだ  
その炎が  
どんな姿をしているのかを  
じっと見つめ続ける

消すのではない  
消すことはできない  
とらわれた姿を解き放ち  
別の力に変えることだ

そのとき流れ出る  
いのちの水を  
たしかに味わえますように



※高知県四万十市・黒尊溪谷にて



世界が  
わからないのは  
世界が  
幻だからなのではない

幻を見る目で  
世界を見  
幻を聞く耳で  
世界を聞き  
幻にふれる手で  
世界にふれ  
幻を考える心で  
世界を考えているからだ

見ていないものを見  
聞いていないものを聞き  
ふれていないものにふれ  
考えていないことを考えるとき

世界と  
ともにあるじぶんが  
ひらかれてゆく





感動が  
つくられているあいだに  
その裏で起こることが  
見えなくさせられている

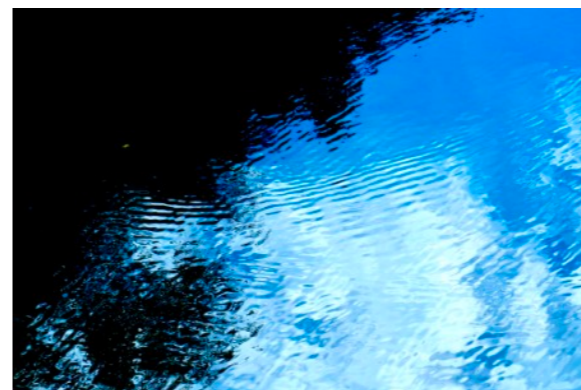
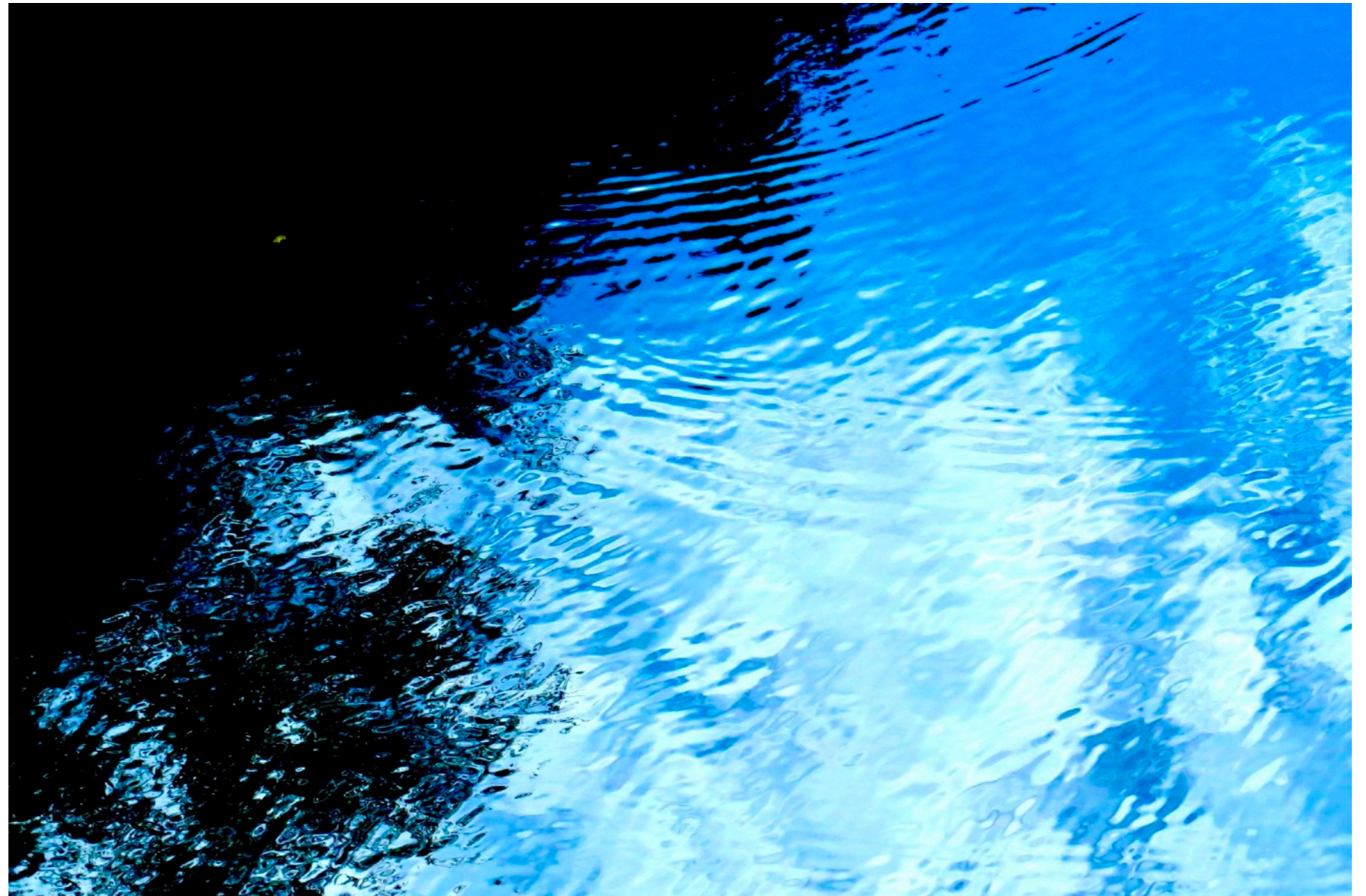
いつのまにか  
悪の道が敷かれ  
その笑いを聞かないですむように

競い合うことが  
互いに高め合うステージではなく  
ひとを駒にした  
争いのステージとなっている

ほんとうは裏で  
誰が戦っているゲームなのか  
知らないふりをさせられながら

学んでいるはずなのに  
問うことは許されず  
与えられた答えへと向かう  
物語に導かれている

知らぬまに  
機械に思考が編集され  
考えることさえ奪われて



※愛媛県久万高原町・八釜の甌穴群にて



じぶんを  
溯る

はるかな記憶を辿り  
鬩を越えれば

そこにあるのは  
源から流れだしている  
見えないからだ  
見えないところ

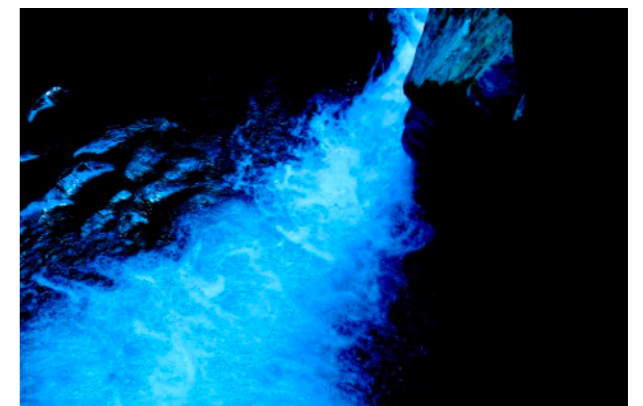
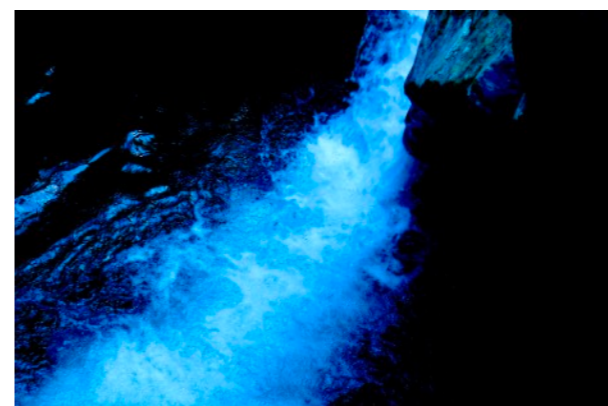
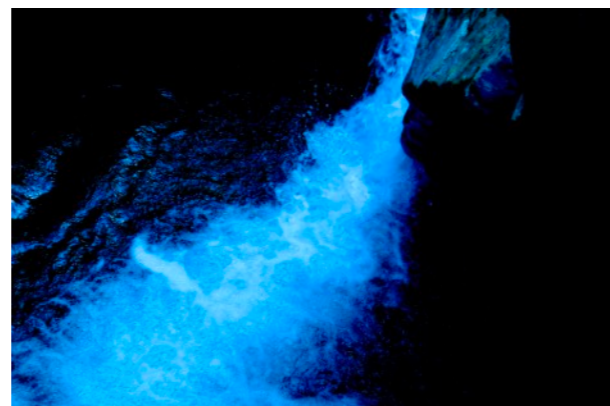
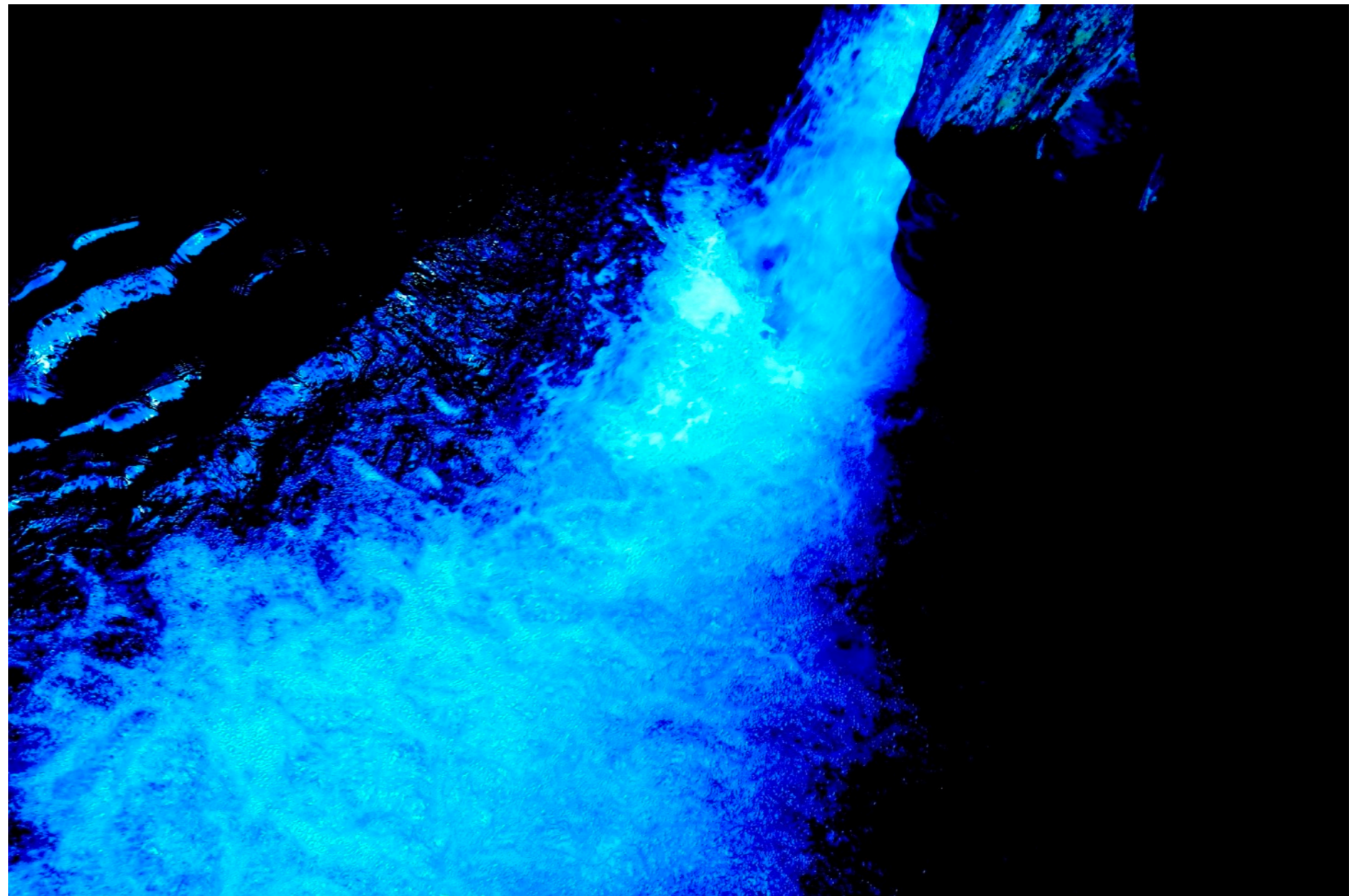
生まれる前の  
じぶんという未知への  
旅はつづく

源から  
じぶんを見つめるのだ

見えずにいた  
じぶんを映しだせば

そこにあらわれるのは  
見えなかったからだ  
見えなかったところ

源から流れ出している  
わたしという謎



※愛媛県久万高原町・八釜の甕穴群にて



ひとは  
秘された  
言葉である

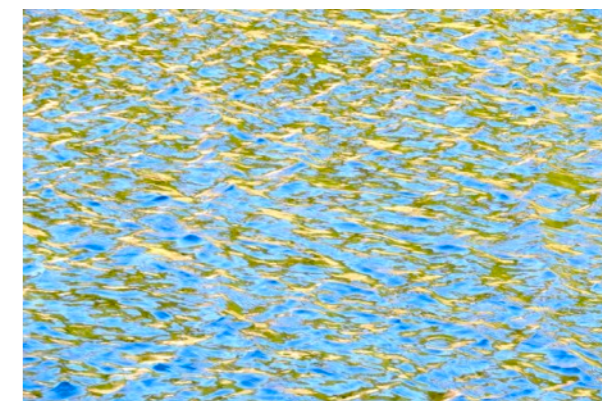
秘された  
言葉は  
それを  
聞き得る者にのみ  
聞かれる

言葉が  
秘されているのではなく  
聞く耳こそが  
秘されている

聞くためには  
問わねばならない

教えられることなく  
みずからが  
問いそのものとならねばならない

真に問うとき  
ひとは  
みずからが  
秘された言葉となる





新たなものが  
生まれるとき  
古きものは  
失われるのではない  
姿を変えてゆくのだ

そしてそれはまた  
新たなものとして生まれてくる

ひとが生まれ  
年を重ね老いてゆくとき  
それまでのいのちは  
失われるのではない  
姿を変え年輪となってゆくのだ

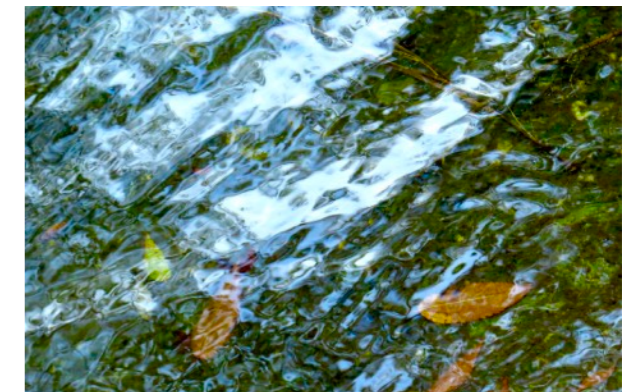
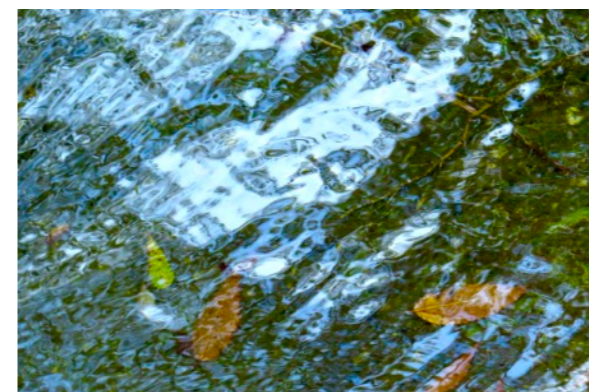
そしてひとはまた  
新たな子どもとして生まれてくる

ひとは心を  
さまざまに彩ってゆくが  
それらすべての色は  
失われるのではない  
色と色が重ねられてゆくのだ

そしてひとはまた  
新たな色を重ねるために生まれてくる

時代が  
変わってゆくとき  
かつての時は  
失われるのではない  
姿を変え奥行きがつくられてゆくのだ

そして時はまた  
新たな時代を生み出してゆく





いるべき場所が  
わからなくなり  
どこにも  
いたくなくなる時

あるべきじぶんが  
わからなくなり  
だれにも  
なりたくなくなる時

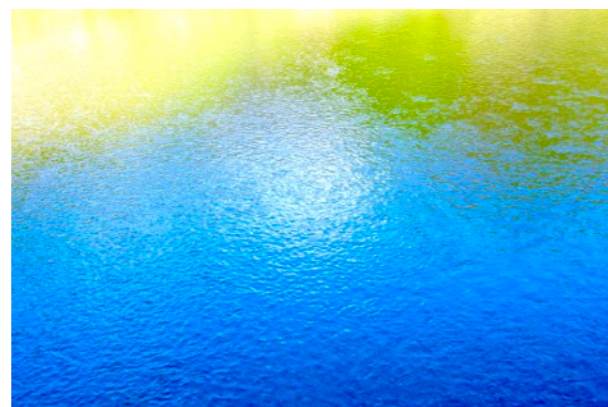
静かに耳をすませば

此処でも其処でもない処  
私でも他人でもない者に

あわいの門はひらかれる

此岸と彼岸から離れ  
始まりと終わりから離れ  
因と果から離れ  
静と動から離れ  
生と死から離れ  
楽と苦から離れ  
光と闇から離れ  
天と地から離れ…

あわいの沈黙から  
生まれてゆく響きに  
ただ耳をすませる





ぼくのなかの  
ピエロよ

もっと  
戯けてみせないか  
なくしてしまった  
じぶんを取りもどすために

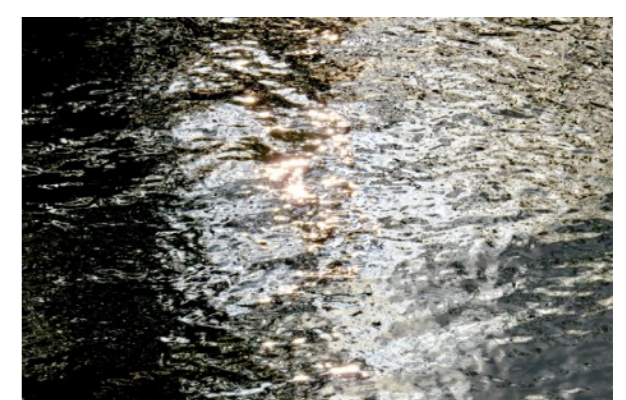
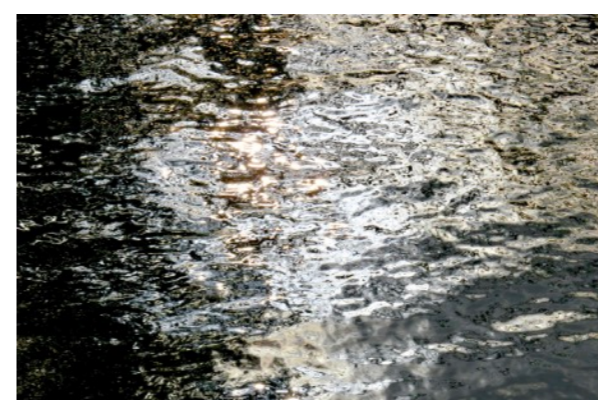
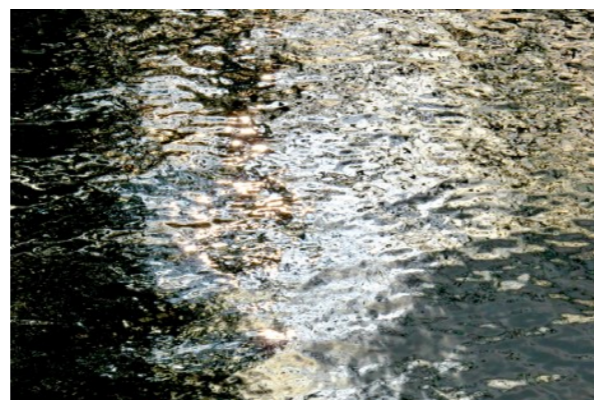
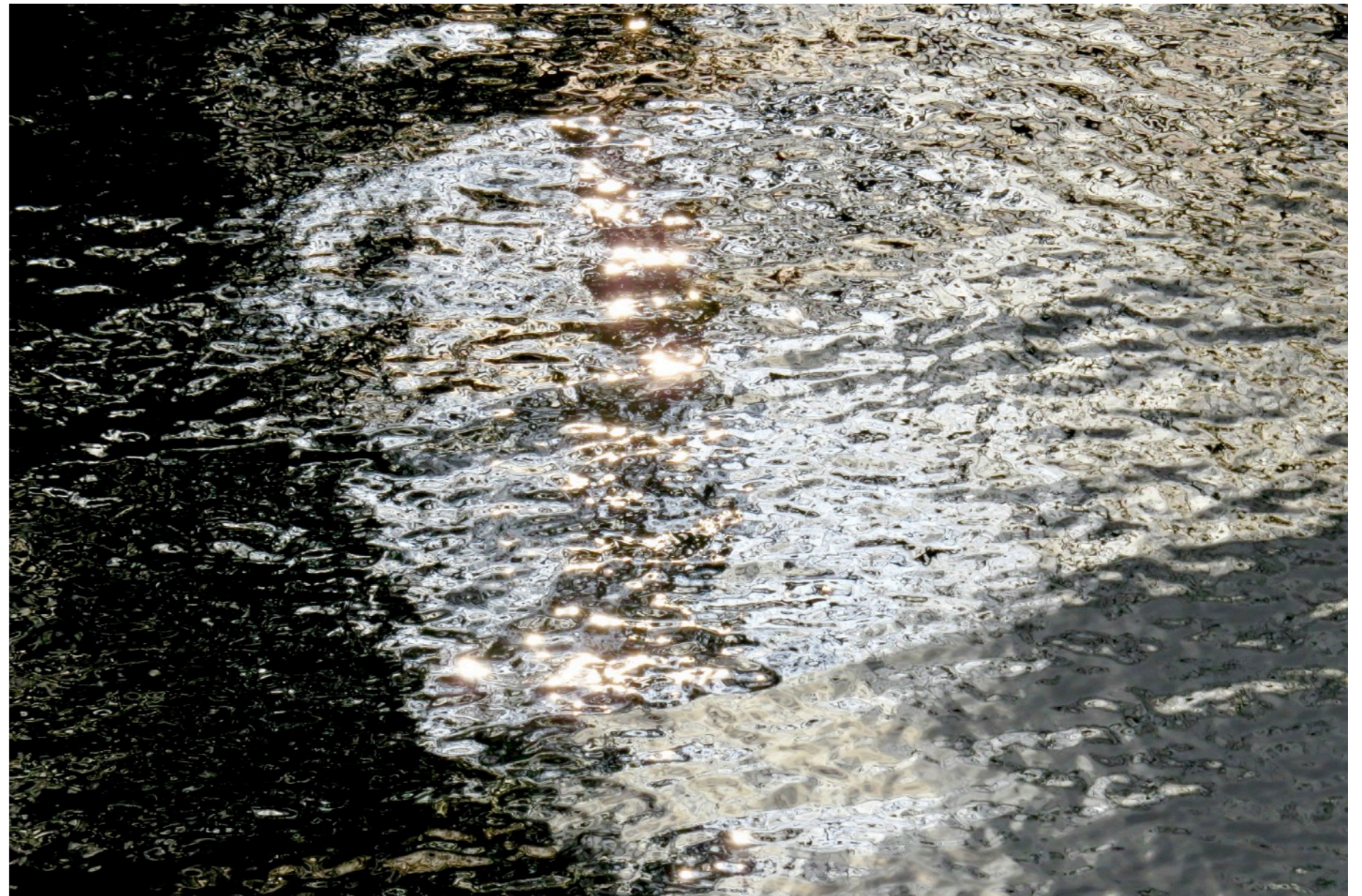
数々の仮面を外し  
忘れていた顔を露わに  
赤裸々な姿で登場し  
愚直なまでに  
あからさまな言葉で

つくられてしまっていた  
ぼくという役どころに  
異議申し立てをする  
そんな口上を述べるのだ

もとより  
響きを買うのは承知の上  
ぼくという他者の  
機嫌を損ねることこそが身上

ぼくのなかの  
ピエロよ

ぼくが目覚めのために  
笑って怒って泣いて  
戯けて遊べ！





☆photopos-3370 2023.11.30

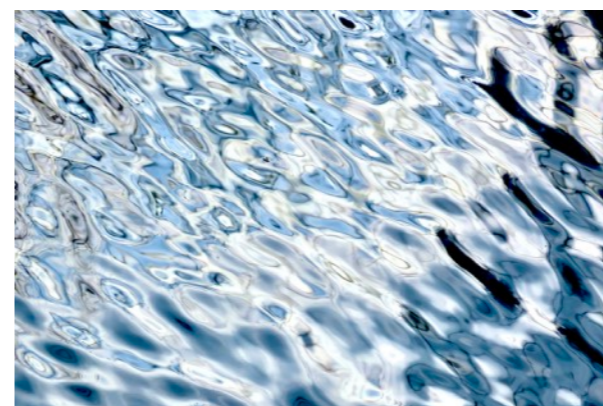
多数派ではないからといって  
少数派になったりはしない  
わたしは派ではないからだ  
わたしはわたしとしてわたしをゆく

強者ではないからといって  
弱者になったりはしない  
わたしはその対立のなかにはいないからだ  
わたしはわたしとして立つ

どんな経歴を並べても  
それで誰かになったりはしない  
わたしは肩書きのなかにはいないからだ  
わたしは誰でもないわたしとしてある

どんな言葉を書き綴ったとしても  
その言葉はいずれ名無しになる  
言葉はわたしのものではないからだ  
言葉はだれのものでもない言葉としてある

どんなに忘れ去られたとしても  
それで魂が消え去ったりはしない  
すべては記されているからだ  
魂はかけがえのないものとして永遠にある



※愛媛県伊予郡砥部町・通谷池にて



言の葉に  
意味という  
悪戯者（いたずらもの）が誘いかけ  
あれやこれやと迷わせる

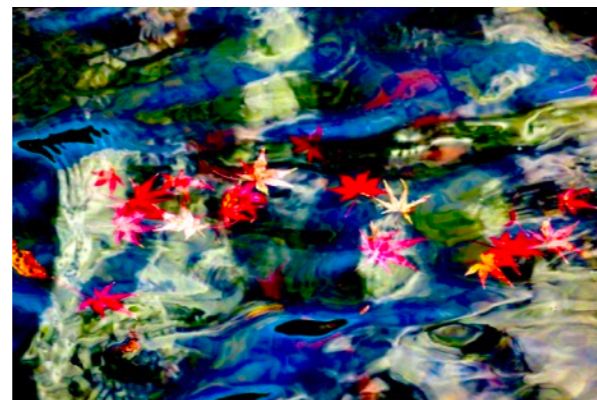
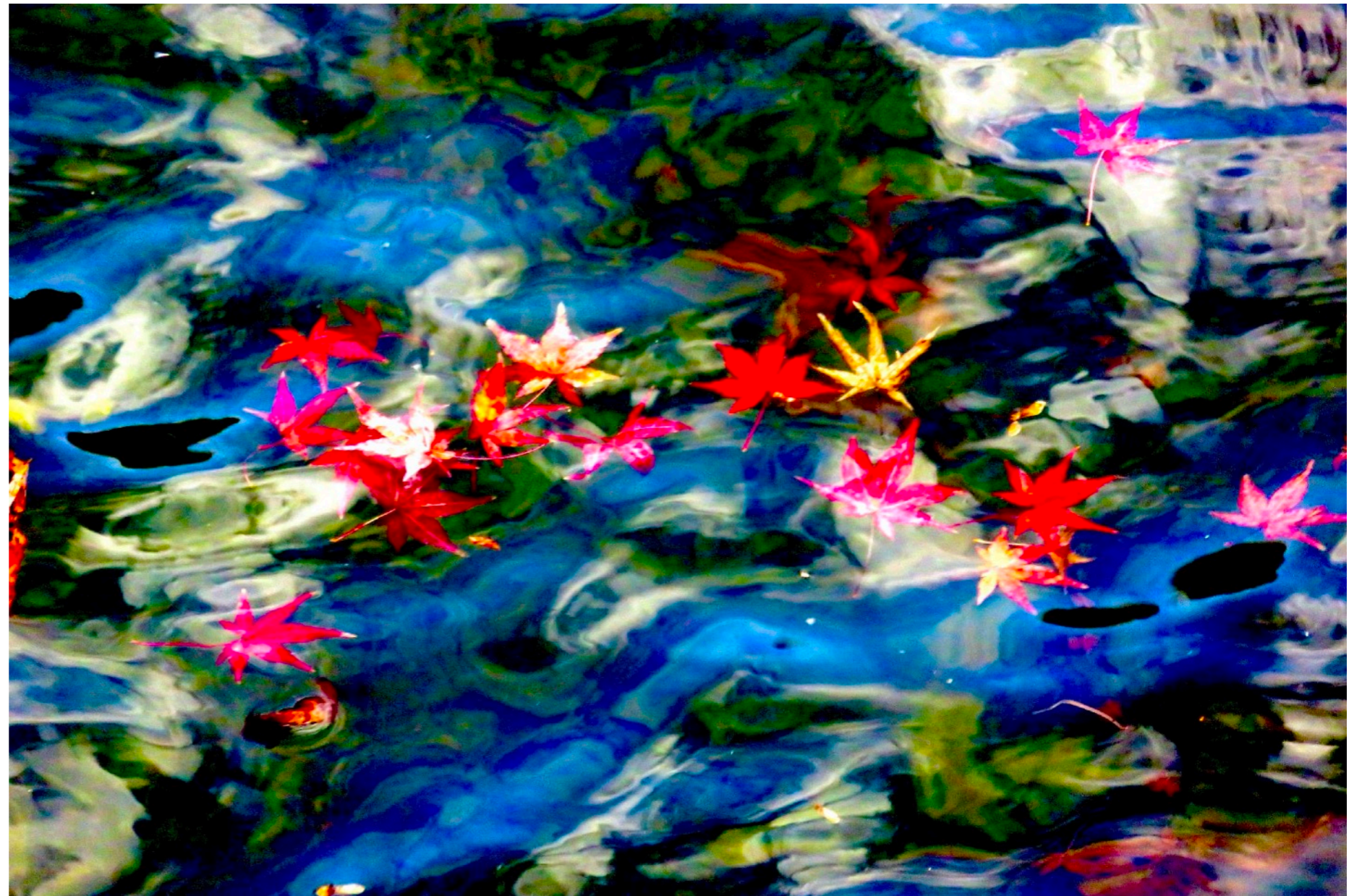
悪戯者は  
謎かけつづけ  
謎は謎を生み

言の葉は  
季節の色を詠いつつ

語りえるのか  
語りえないのか

語りえると思えば  
言の葉は流れ去り  
語りえぬと思えば  
言の葉はしばし留まり

遊びをせんとやうまれけむ  
うそぶくばかりの悪戯者よ  
汝はどこから生まれ  
どこへゆくというのか  
言の葉に謎を残して



※愛媛県伊予郡砥部町・通谷池にて



☆photopos-3372 2023.12.2

いちばんはじめのキャンバスには  
なにも描かれていない

わたしが描きつづけてきたことが  
わたしとして描き出されてゆく

それを否定することもできるだろうが  
その否定もまた  
その絵には描かれてゆく  
塗りつぶしても  
それもまた絵になってゆく

キャンバスは決して消えないから  
描きたい絵を描こうとすれば  
そこからこそ描き始めなければならない

いちばんはじめのわたしには  
なにも与えられていない

わたしが与えつづけてきたことが  
わたしに与えられている

それを否定することもできるだろうが  
その否定もまた  
わたしに与えられる  
与えないでいること  
それもまた与えられながら

わたしは決してなくなりたくないから  
望むものが与えられたいならば  
それをこそ与えなければならない



※愛媛県松山市・重信川河口にて



わたしのこころを  
ことばにうつし  
あなたへ

あなたは  
わたしのことばを  
こころにうつすだろうが

わたしはそのこころを  
みることができない

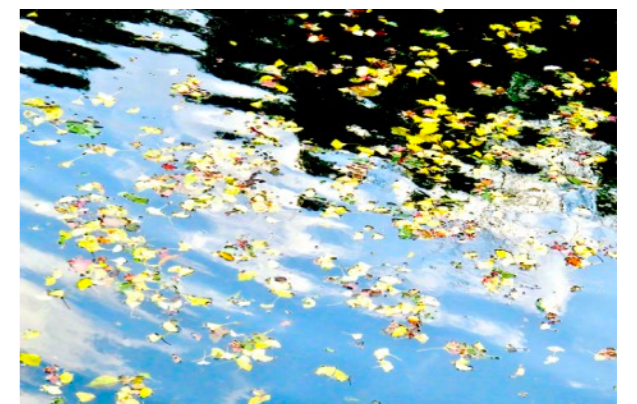
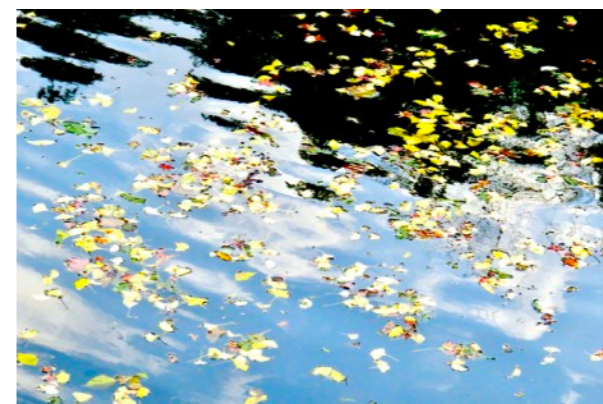
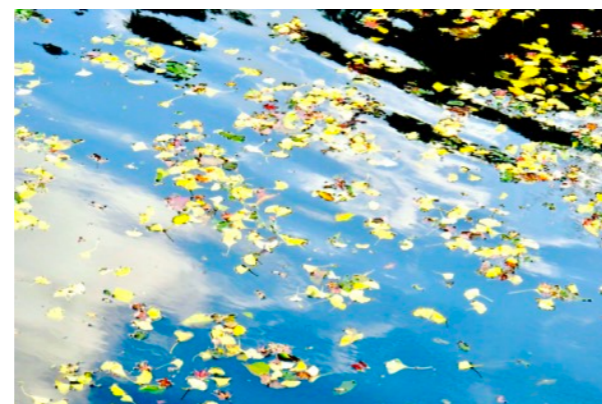
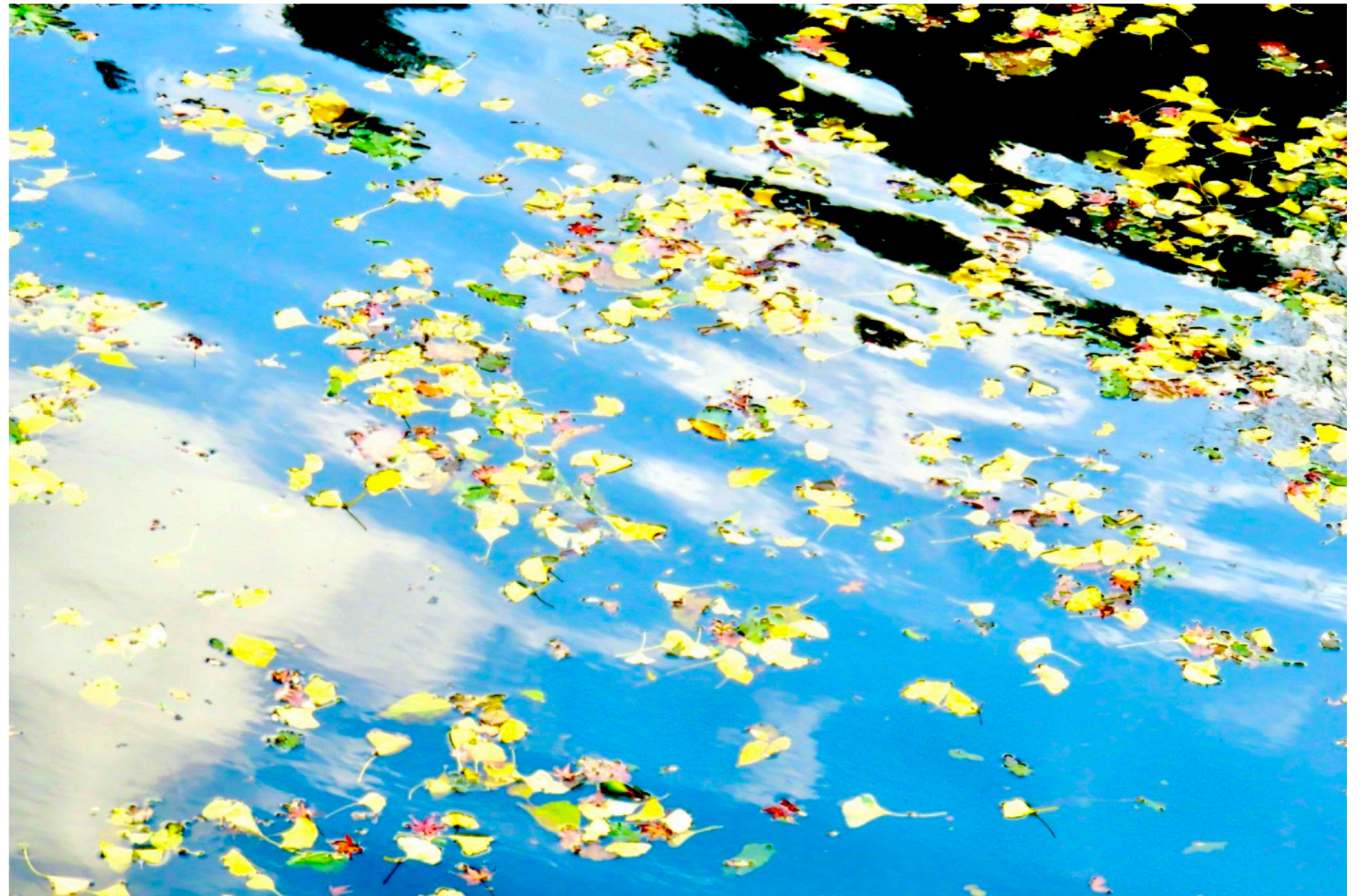
あなたのこころもまた  
ことばへとうつされ  
わたしへ

わたしは  
あなたのそのことばを  
こころにうつすだろうが

そのこころを  
あなたはみることができない

そうして  
ことばはうつろい  
こころもまた  
うつろってゆくだろうが

ふと  
うつろうこころが  
ともに  
ことばなきまま  
わたしとあなたに  
おとずれる  
ふしぎ・・・





乱れ  
彷徨う心を  
どうすればいいのか

その心をここにもってこいという  
禅のようなショック療法を受けるのも  
それはそれでいいが

それで収まるような  
心ではないだろう

心のなかには  
かぞえきれないほどの  
存在たちが轟めいている

天使を探そうとしても  
まず見つかりはしないだろう  
悪魔さえそこで笑っているばかりだ

しかし  
己のなかには  
乱れ彷徨う者だけではなく  
その声を聴く者もいる

その場所に赴くことだ

たとえどんなに  
乱れ彷徨う者が狂乱しても  
ただただその声を  
聴く者となる

聴きつづけることで  
そこには  
不思議な力が生まれる  
その力とともに生きることだ





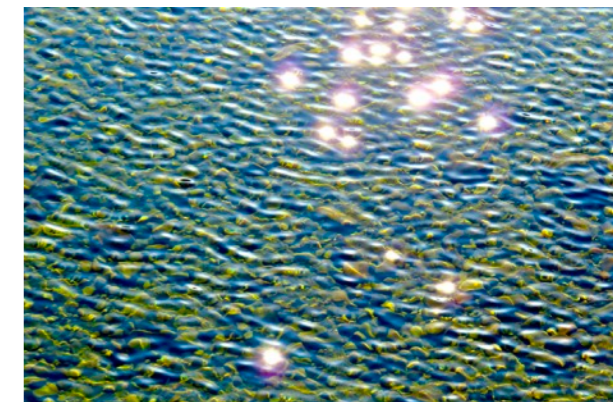
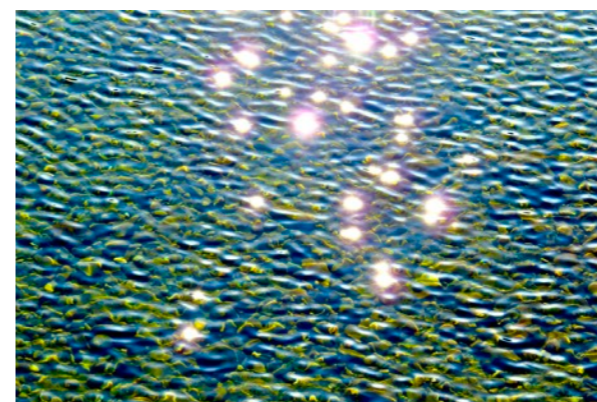
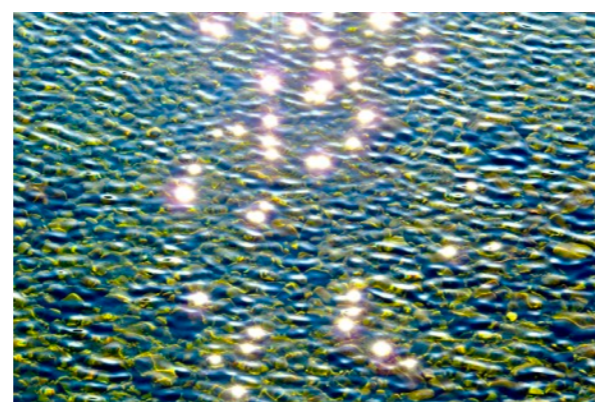
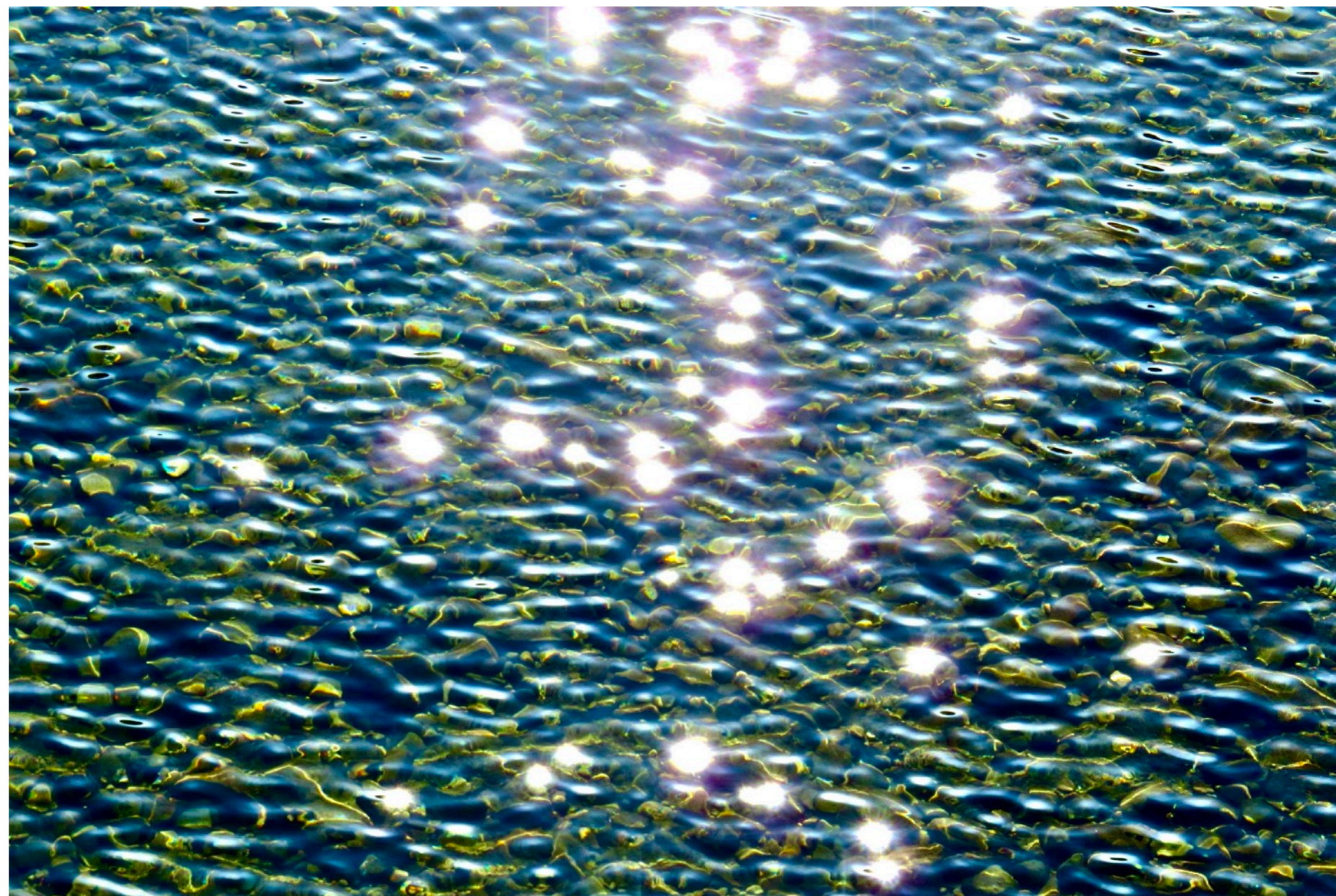
深い闇のなかを  
小さな灯りで照らしながら  
道を探してゆくように

世界は広く深く  
はてしないのに  
わたしたちは  
意識というわずかな光で  
世界を見ることしかできない

けれど意識の光の  
まるで届かないところにも  
ほんとうの心ははるかに  
ひろがっているはずだから

わたしたちは  
光の意識だけでは  
見えないままでいる心を  
育てていかなければならない

闇のなかでも  
道を探せるように  
そして道なきところでも  
たしかに道を歩んでゆけるように



※高知県四万十市・岩間沈下橋にて